

## 第11回野菜需給・価格情報委員会の概要

### 1 日時

平成23年11月4日（金）14:00～16:00

### 2 場所

独立行政法人農畜産業振興機構 北館6階大会議室

### 3 概要

#### (1) 夏秋野菜の需給・価格の状況（資料1）の説明

・夏秋キャベツは、9月下旬以降、台風12・15号の影響により入荷量が前年を下回り、価格が前年を上回る場面もあったが、入荷量は前年をやや上回り、価格は高値であった前年をかなり下回って推移した。

・たまねぎは、昨年までは北海道産が2年連続で不作となったことから価格も高騰した。今年は全体的に小玉傾向ではあったが、入荷量は不作であった前年をやや上回り、価格は高値だった前年を大幅に下回った。

・夏だいこんは、7月の北海道産の遅れや9月の台風の影響から、入荷量は不作であった前年並みで、価格は前年をかなり下回って推移した。

・秋にんじんは、10月に台風等降雨の影響を受けたが、入荷量は不作であった前年をかなり上回り、価格は高値であった前年を大幅に下回って推移した。

・夏はくさいは、8月までは順調な生育により入荷量は前年を上回り、価格は前年を大幅に下回って推移したが、9月中旬以降は長雨や高温の影響を受けたことから、入荷量は前年を大幅に下回り、価格は前年を大幅に上回って推移した。

・夏秋レタスは、7月以降、8月中旬までは比較的順調な入荷となり、価格も前年を下回って推移したが、8月下旬以降、降雨等の影響により入荷量が減少し、価格も一時期高騰した。10月以降は生育が回復し、高値であった前年を大幅に下回って推移した。

・夏秋きゅうりは、8月下旬以降の降雨、その後の台風等の影響により入荷量が前年を下回り、価格が前年を上回る場面もあった。価格の変動が激しかった。

・夏秋トマトは、天候不良等により、入荷量が前年を下回り、価格が前年を上回る場面もあったが、全体としては入荷量が前年をかなり上回り、価格は前年をやや下回って推移した。

#### (2) 秋冬野菜の需給・価格の見通しに関する意見交換

##### ① 消費分科会における需要・消費等に係る意見の報告

##### ア 景気、天候などの要因による消費動向

・景気が低迷しており、消費は減退傾向にある。

・今年の秋は例年より気温が高いため、きのこやはくさい等鍋食材の需要が弱く、逆にレタス、きゅうり、トマト等サラダ食材の需要が依然として順調である。

##### イ 震災、原発事故の影響による消費動向

・原発事故に伴う消費減退は、徐々に薄れてきている。

・ただし、きのこ等の新たな放射性物質の検出や、ホットスポットの報道がされると、関係

する県の幅広い品目も敬遠される場合がある。特に、食の安全性への関心が高い学校給食や子供を主婦からは敬遠されることがある。

#### ウ 野菜全体の販売状況

- ・消費者が購入しやすい価格帯や量目を工夫し、いままで1個売りしていたものを1/2、1/4等カット売りをしたり、複数個の袋売りのものをバラ売りにしたり、大玉だけの品揃えから小玉等複数個の規格をそろえるようにしている。
- ・直売所においては、野菜を加工して中食として提供する取組が盛んになってきている。
- ・消費者の多様な選択に対応するため、同一の品目について複数産地のものを併売している。また、選択できる利便性から、インターネットを利用した通信販売が活発になっている。

#### エ 全体(主要6品目)の傾向

- ・一般家庭においては、キャベツ、はくさい、たまねぎ等で柔らかい品種のものが好まれる傾向となっている。一方、業務用のキャベツにおいては、寒玉系のように堅く巻きのしまった歩留りの良いものが好まれる。
- ・冬場の野菜消費には、蒸し鍋による需要拡大が期待できる。

#### オ 冬キャベツ

- ・秋から冬にかけては、サラダ感覚で食べられる春系キャベツが主体となり、柔らかく消費者に好まれ、売りがよくなるので、需要の伸びに期待している。
- ・カット業者は、色味やボリューム感の関係から寒玉系を好む。

#### カ たまねぎ

- ・今年の北海道産は小玉傾向で、業務用の大玉は不足することが想定され、円高も背景としてアメリカ産の大玉の利用が強まる見込み。
- ・家計消費では、1回に使い切れるM玉のニーズもあり、L玉のバラ売り、M玉の袋詰め等作柄に応じた売り方を行っていく必要がある。

#### キ 秋冬だいこん

- ・消費者ニーズに対応して、販売形態の多くが1/2カット売りとなっているが、そのことが販売量の減少につながっている。色々な食材との組み合わせで販売量を増やす方策を考える必要がある。

#### ク 冬にんじん

- ・主力になることはないが、逆に季節を問わず安定した売り上げがある。
- ・サラダ等の生食用やジュース用等、用途に適した品種で販売提案をしていくことも考えている。

#### ケ 秋冬はくさい

- ・当面は関東産が中心になるが、消費者の選択肢を広げるため、引き続き複数産地を併売する予定である。
- ・はくさいは夏場の需要とのバランスを考慮した計画生産が必要と思われる。

#### コ 冬レタス

- ・レタスは、冬になると甘味が増してくるので、おいしい食材として提案していきたい。
- ・例年1月から2月にかけて不足する場面があり、業務筋では保険的な位置付けで外国産の

手当てを行っている。

#### サ その他

- ・大学進学時や新社会人になる際の一人暮らし等、自炊を始めるタイミングに合わせて食育を行うことが重要である。

### ② 秋冬野菜の各品目毎の見通し

#### ア 冬キャベツ

##### (ア) 生産者側の報告

- ・作付面積は、千葉は前年同、神奈川、愛知は前年比103%、全体では102%とほぼ前年並み。
- ・生育状況は、千葉は天候不良の影響を受けたが、10月中旬以降の好天により回復し前年並みの作柄。神奈川は台風15号の影響により一部地区で塩害の影響を受けたが、全体的に概ね順調。愛知は夏場の高温、長雨による定植遅れ、台風15号の影響を受け、1週間程度の遅れ。
- ・11月から3月までの主産3県の出荷見通しは、期間トータルで前年比111%、過去3か年平均比107%とかなり上回る。

##### (イ) 各委員の意見

- ・台風の影響を受けた産地があったものの、年内出荷についてはさほど問題はない。
- ・加工用は地場産のみで契約しているケースが増えており、市場からの調達をしない業者が多くなっている。
- ・作付面積が前年を上回る傾向であることから、価格は前年を下回る。
- ・年内の気温が高いと生育が前進し、年明け以降、入荷量が減り価格が高くなる可能性がある。

#### イ たまねぎ

##### (ア) 生産者側の報告

- ・作付面積は、主産地の北海道で前年比97%とやや下回る。
- ・生育状況は、北海道西部は概ね不良、東部は前年並み。早生ものは定植遅れによる生育不良等の影響がみられるが、中生以降のものよりも収量は高い見込み。中生・晩生ものは定植遅れによる生育不良、肥大期の高温・干ばつの影響により、地域によって著しく減収となる産地がある見込み。
- ・11月から3月までの出荷見通しは、期間トータルで前年比は105%とやや上回るが、過去3か年平均比は80%と大幅に下回る。

##### (イ) 各委員の意見

- ・北海道内の生育と収穫についてはバラつきがある。特に、空知管内では収量が落ち込み小玉傾向、北見管内は前年並みの収量。
- ・出荷量は、全体としては前年よりは多いが、前年よりは少ない傾向。価格は前年より低いが、前年より高くなる見込み。

- ・中国産アレルギーも少なくなっており、加工用は相場次第で使用する傾向。

## ウ 秋冬だいこん

### (ア) 生産者側の報告

- ・作付面積は、千葉、徳島は前年同、神奈川は前年比102%、全体では99%と前年をわずかに下回る。
- ・生育状況は、千葉は播種期に適度な降雨があったこと等から順調。神奈川は台風15号の影響が一部地域で見られるが、大勢にはほとんど影響ない。徳島は昨年より前進化した播種体系だったが、台風15号の影響により再播種する圃場があったことから、平年並みの出荷の見込み。
- ・11月から3月までの主産3県の出荷見通しは、期間トータルで前年比は107%、過去3か年平均比105%と上回る。

### (イ) 各委員の意見

- ・小規模産地は作付面積減。
- ・一部地域で台風等の影響が出ているが、生育は概ね順調であり、価格は不作の前年を下回る見込み。
- ・年内の気温が高い場合には出荷が前進することから、年明けは入荷が減り価格は高めとなる可能性がある。

## エ 冬にんじん

### (ア) 生産者側の報告

- ・作付面積は、千葉は前年比101%、愛知は91%、長崎は102%、全体では前年並み。
- ・生育状況は、千葉は天候不良の影響により若干の遅れが見られるが、概ね順調。愛知は年内分は概ね順調だが、年明け分は台風の影響により平年より2週間程度の遅れ。長崎は9月以降干ばつ気味で推移していたが、現在は順調。
- ・11月から3月までの主産3県の出荷見通しは、期間トータルで前年比は126%、過去3か年平均比112%と上回る。

### (イ) 各委員の意見

- ・作柄は、前年よりは順調であるが、平年並み。
- ・出荷量が前年より大幅に増えることから、価格も高かった前年を下回るが、平年並みとなる見込み。
- ・国産が豊作傾向なことから、加工用にんじんの契約を中国産から国産に切り替える業者が増えている。

## オ 秋冬はくさい

### (ア) 生産者側の報告

- ・作付面積は、茨城、兵庫は前年同、愛知は前年比93%、全体では101%と前年並み。

・生育状況は、茨城は台風15号の影響により、出荷時期の早いものほど損傷を受けているが、遅いものは回復する見込み。愛知は8月から9月にかけての高温と台風の影響により播種・定植が遅れたが、10月は好天となったことから回復傾向。兵庫は台風の影響により出荷開始が遅れたため、年内は出荷数量の減少が見込まれるが、年明け以降は天候が安定すれば回復する見込み。

・11月から3月までの主産3県の出荷見通しは、期間トータルで前年比120%、3か年平均比116%と大幅に上回る。

(イ) 各委員の意見

- ・今後の天候にもよるが、価格は前年をやや下回る見込み。
- ・今後、気温が高く推移すれば、需要の減少と出荷量の増加により、相場は低迷する。

カ 冬レタス

(ア) 生産者側の報告

・作付面積は、茨城は前年比96%、静岡は99%、兵庫は98%、香川は前年同、全体では98%と下回る。

・生育状況は、茨城は台風15号通過前に講じた防風対策や、通過後の防除により生育への影響は少ない。静岡は台風15号の直撃を受けたことにより、早い作型では一部定植苗の流出やマルチ剥がれがみられるが、12月以降の出荷分については大きな影響はない模様。兵庫は台風の影響により1週間程度の遅れが見られるが、今後の天候が安定すれば平年並みの出荷に回復する見込み。香川は定植後の台風12・15号や降雨の影響により、生育不良、徒長傾向。

・11月から3月までの主産3県の出荷見通しは、期間トータルで前年比105%、3か年平均比102%と上回る。

(イ) 各委員の意見

- ・兵庫、香川において、台風12・15号の影響やその後の降雨による作業の遅れが見られるが、全体としては概ね順調。
- ・価格は前年並みを見込む。
- ・各地で他作物への転作等により作付面積減。
- ・年内は各地順調な供給が見込まれるが、年明け以降に低温となれば、入荷量は減少することから、価格は高めとなる可能性あり。

③ その他（輸入野菜の増加について）の意見

- ・たまねぎは中国産や米国産が恒常的に入ってきている。中国産アレルギーも薄れている。
- ・輸入の増加は円高やデフレの影響もある。
- ・外食ではアジア地域に進出した企業が、アジア全域にて原料調達する動きが出てきている。

(3) 委員の意見を踏まえた夏秋野菜の需給・価格の見通しの野菜需給協議会への報告

(2) の生産者側の報告及び各委員の意見等を藤島座長が取りまとめ、各委員に了承を得た

上で、11月11日開催の第14回野菜需給協議会に以下のとおり報告することとなった。

ア 冬キャベツの需給・価格の見通し

- ・作付面積は、主産地である愛知県及び神奈川県が前年をやや上回り、千葉県が前年並みで、全体としては前年をやや上回る見込み。
- ・生育状況は、一部の県で台風等の影響を受けたものの、全体としては概ね順調。
- ・出荷量は、作付面積がやや増加し、生育も概ね順調なことから、少なかった前年をかなり大きく上回り、平年を上回る見込み。
- ・出荷量が不作の前年を上回ることから、価格は、前年を下回る見込み。なお、年内の生育が前進した場合は、年明け以降、価格が前年を上回る可能性がある。

イ たまねぎの需給・価格の見通し

- ・作付面積は、主産地である北海道の一部地域で雹害による廃耕があったことから前年をやや下回る見込み。
- ・生育状況は、産地や作型毎によってばらつきはあるが、全体としては前年よりは順調。
- ・出荷量は、作付面積がやや減少したものの、生育が不作だった前年より順調なことから、少なかった前年をやや上回るものの、平年との比較では大幅に下回る見込み。
- ・出荷量が不作の前年を上回ることから、価格は、前年を下回るものの、平年比では上回る見込み。

ウ 秋冬だいこんの需給・価格の見通し

- ・作付面積は、主産地である神奈川がやや増加、千葉及び徳島が前年並みであったものの、その他の産地が減少し、全体では前年をわずかに下回る見込み。
- ・生育状況は、台風被害の影響も少なく、概ね順調。
- ・出荷量は、作付面積がわずかに減少したものの、生育が概ね順調なことから、前年、平年ともに上回る見込み。
- ・出荷量が不作の前年を上回ることから、価格は、前年を下回る見込み。なお、年内の生育が前進した場合は、年明け以降、価格が前年を上回る可能性もある。

エ 冬にんじんの需給・価格の見通し

- ・作付面積は、主産地である千葉及び長崎で前年をわずかに上回るものの、愛知で前年をかなり下回り、全体では前年並みとなる見込み。
- ・生育状況は、台風等の天候不良により若干の遅れが見られるものの概ね順調。
- ・出荷量は、作付面積が前年並みで、生育も主力の千葉産が順調なことから、前年、平年ともに上回る見込み。
- ・出荷量が不作の前年を大幅に上回ることから、価格は、高かった前年を大きく下回り、平年並みとなる見込み。なお、加工・業務用野菜の国産回帰の動きもみられる。

オ 秋冬はくさいの需給・価格の見通し

- ・作付面積は、愛知が前年を下回るものの、茨城及び兵庫が前年並みとなり、全体では前年並みとなる見込み。
- ・生育状況は、台風の影響等により、葉の損傷や播種・定植の遅れが見られるものの、10月

の好天により回復する見込み。

- ・出荷量は、作付面積が前年並みで、台風の影響等により葉の損傷や播種・定植の遅れが見られるものの、10月の好天により生育が回復傾向にあり、前年、平年ともに上回る見込み。

- ・出荷量が前年を上回ることから、価格は、今後の天候にもよるが、前年をやや下回る見込み。特に、気温が高めに推移すれば、需要の減少と出荷量の増加から、価格はさらに下落する可能性がある。

#### カ 冬レタスの需給・価格の見通し

- ・作付面積は、香川が前年並みであるが、茨城、静岡、兵庫等が前年を下回り、全体では前年をわずかに下回る見込み。

- ・生育状況は、兵庫、香川で台風の影響による生育に遅れが見られるものの、全体としては大きな影響はない模様。

- ・出荷量は、作付面積がわずかに前年を下回り、台風の影響により、一部産地で生育遅れが見られるものの、全体としては前年をやや上回り、平年をわずかに上回る見込み。ただし、1～2月には平年を下回ることもある。

- ・出荷量が前年をやや上回るものの、価格は、前年並みとなる見込み。ただし、1月から2月にかけては出荷量が減少し、価格が平年を上回る可能性がある。

#### キ その他夏秋野菜全体の消費動向等

##### (ア) 景気、天候などの要因による消費動向

- ・景気が低迷しており、消費は減退傾向にある。

- ・今年の秋は例年より気温が高いため、きのこやはくさい等鍋食材の需要が弱く、逆にレタス、きゅうり、トマト等サラダ食材の需要が依然として順調である。

##### (イ) 震災、原発事故の影響による消費動向

- ・原発事故に伴う消費減退は、徐々に薄れてきている。

- ・ただし、きのこ等の新たな放射性物質の検出や、ホットスポットの報道がされると、関係する県の幅広い品目も敬遠される場合がある。特に、食の安全性への関心が高い学校給食や子供を持つ主婦から敬遠されることがある。

##### (ウ) 野菜全体の販売状況

- ・消費者が購入しやすい価格帯や量目を工夫し、いままで1個売りしていたものを1/2、1/4等カット売りをしたり、複数個の袋売りのものをバラ売りにしたり、大玉だけの品揃えから小玉等複数の規格をそろえるようにしている。なお、カット売りの増加が販売量の減少につながっている。

- ・直売所においては、野菜を加工して中食として提供する取組が盛んになってきている。

- ・消費者の多様な選択に対応するため、同一の品目について複数産地のものを併売している。また、選択できる利便性から、インターネットを利用した通信販売が活発になっている。

##### (エ) 秋冬野菜の消費動向

- ・一般家庭においては、キャベツ、はくさい、たまねぎ等で柔らかい品種のものが好まれる傾向となっている。一方、業務用のキャベツにおいては、寒玉系のように堅く巻きのしまった歩留りの良いものが好まれる。

- ・冬場の野菜消費には、蒸し鍋による需要拡大が期待できる。

(オ)野菜の輸入動向

- ・①中国産野菜へのアレルギーの減少、②国産野菜の価格高騰の頻度が高くなっていることのリスクヘッジとして、一定量を輸入により確保しようとする動き、③アジアに進出した外食産業等におけるアジア全域での原料調達の動き、④円高やデフレの進展等から、輸入量は増加傾向にある。

(カ)その他

- ・大学進学時や新社会人になる際の一人暮らし等、自炊を始めるタイミングに合わせて食育を行うことが重要である。